ミステリー小説で見るスウェーデンの福祉

ばおばぶ代表　五十嵐正人

第２回　レイフ・GW・ペーション
まるで日本のような、そして……

前回はさすが福祉先進国と感じられるところを、スティーグ・ラーソンのミステリー小説から読み取ってみた。しかしスウェーデンと言えども完璧な社会福祉の国ではない。１９４５年ストックホルム生まれの作家、レイフ・GW・ペーションの作品を今回は読んでいく。

最初の引用は創元文庫版『許されざる者』（久山葉子訳）から。『許されざる者』は脳梗塞で倒れた国家犯罪捜査局の元長官ラーシュ・マッティン・ヨハンソンが入院治療を受けながら、そしてリハビリをしながら、古い事件を捜査していくストーリーだ。そんな中で、ラーシュの妻ピアとラーシュの主治医が、こんな会話を交わしている。主治医は退院後、ラーシュをホームに入れてみてはどうかと提案するのだが。

> 退院後は、彼のような患者専用の退院後医療とリハビリに特化したホームに入れるのがよいという提案をしたのだ。
> 「論外よ」ピアは頭を振った。「あの人が納得するわけがないもの」
> 「説得してみては？　数カ月ですむかもしれませんし」
> 「そのつもりもないわ」いったいこの子は何を言っているのー。
> 「でも、そうしなければ送迎が大変ですよ。それに家での介護も。タクシー送迎を使う権利はあるけれど、自宅に介護士を呼ぶ時間数はあまりもらえないと思います。特に今は夏で介護士も皆夏休みをとっているし」
> 「主人の診療とリハビリの予定と行先を教えてちょうだい。あとはわたしが手配します」
> 「自腹で手配できるなら色々可能性はありますよね。残念ですが、この国の福祉介護はそういう状況なんです。わたしを恨まないでくださいね、ピア。これがわたしにできる最善の提案なんです」

どうだろうか、「送迎が大変ですよ」「自宅に介護士を呼ぶ時間数はあまりもらえない」など、日本のあちこちで日常的に飛び交っている科白に聞こえないだろうか。福祉の先進国スウェーデンであれば、在宅者への送迎サービスは不便がないように充実し、介護士の派遣は必要な時間数が保証されているものだと、私は思い込んでいた。みなさんはどうだろう。

同じく創元推理文庫で久山葉子訳の『見習い警官殺し』には、スウェーデンの高齢者福祉について、こんな記述がある。捜査の一環で９２歳の女性を訪ねた警部のモノローグだ。この女性は高齢だが自宅アパートで自分の暮らしを営んでいる。

> この国の老人福祉が提供する死の待合室に入るまでには、まだまだ時間がありそうだ。この老婆ほど運のよくなかった人は、彼女よりずっと若くても、そこに入るのだ。リノリウム

> の床。つけっぱなしのテレビはもう誰もチャンネルを変えようと思わない。煮魚に温かいフルーツスープ、それをスプーンで食べさせる。マットレスが曲がった背骨を受け止め、疲れた肺には補助器具がつながっている。そこに残された自由は、すべてを終わりにするという選択肢だけ。その自由の存在を意識していればの話だが。そこでは死が辛抱強く待ちかまえている。人生を生きていたときにどんな人間だったとしても。

これは一面の真理であるのかもしれない。しかし一般的に、高齢者の入居する施設のイメージはそれだけではないだろう。ただ「死の待合室」というだけではなく、機能維持のためのリハビリテーションが行なわれていたり、様々なレクリエーションなどもあるはずだ。少なくとも日本の場合はそうした施設が多いはずだし、スウェーデンでも事情は変わらないだろう。にもかかわらず、この警部はネガティブ一色の想像をしているのだ。スウェーデンの高齢者福祉であっても残念ながら「死の待合室」という一面からは逃れられないのだろう。

私たちはスウェーデンの福祉について、実は何も知らないのかもしれない。前回書いた後見解除などの先進性があるかと思えば、日本と変わらないような姿も見える。そして福祉が追いつかない深刻な事情もまた、ミステリー小説から読み取ることができる。それは「格差」と呼ばれる社会問題であり、日本でも課題とされているテーマだ。

『許されざる者』の先の引用に書かれている「自腹で手配できるなら色々可能性はありますよね」という件。社会福祉として供給されるだけしか受けられない国民と、それにプラスして自腹で福祉を買うことが出来る国民がいることが読み取れるだろう。そしてそうした経済格差は、レイフ・GW・ペーションのミステリー小説の中でははっきりとした貧富の差として描かれている。『許されざる者』の別のシーンでは、ラーシュとラーシュを手伝うマティルダとの間でこんな会話が交わされていた。性に奔放とも思える話をするマティルダに対して、ラーシュが問いかける。

> 「そういうのが普通なのか？　つまり、お前さんのような若い世代では」
> 「やめてよ、長官。いい加減、目を覚ます時間よ！　郊外育ち、八〇年代世代、幸せな核家族ですって？　あたしが中学に入ったとき、クラスで親が離婚してないのは三人だけだった。三十人くらいいたのに。ストックホルムの中心のメゾネットタイプの高級マンションに住んでて、貯金がいくらでもある長官は、あたしとは別の惑星の住人よ」

貧しくはないラーシュ（長官）が世代間のギャップと認識していることが、貧しい側からみると「別の惑星の住人」というほどにかけ離れた経済格差だということだ。

『悪い弁護士は死んだ』（久山葉子訳　創元推理文庫）には、こんな記述がある。主人公のエーヴェルト・ベックストレーム警部は自分が勤務している西地区の３５万人近い市民について次のように考えている。

> その中でもっとも高貴なのが国王陛下とその家族で、ドロットニングホルムとハーガにある王宮で暮らしている。それに加えて一ダースほどの億万長者、何百人という千万長者、その対極にはその日食べるものにも事欠く数万人の人々。一日一日を生き延びるために福祉に頼るか、物乞いあるいは犯罪を犯すことを余儀なくされている。それに加えてもちろん、大勢の普通の人たちもいる。

過度な貧富の差という問題を抱えていることで、スウェーデンの福祉は日本以上に大きな格差に蝕まれている印象だ。提供される社会福祉にプラスしてサービスを買える者、提供された福祉でやりくりするしかない者、そして提供された福祉では十分ではなく「物乞いあるいは犯罪を犯すことを余儀なくされている」者。さらに深く読んでいくために、作者であるレイフ・GW・ペーションの略歴などをみていこう。

スウェーデンの首都ストックホルムに生まれたペーションの子ども時代について、『悪い弁護士は死んだ』の「訳者あとがき」にはこんな記述がある。

> 一九四五年生まれの著者は現在七十七歳。自伝によれば、カレが生まれ育ったスウェーデンは今のスウェーデンとは異なるものだった。幼い頃から神童とも言えるほどの優秀さを発揮していた著者だが、小学校では労働者階級の子供ということで先生からも見下され、その階級の子供としては珍しく高校にも進学するが、高校にはほぼ男子生徒しかいないような時代だった。現在では平等を重んじるスウェーデンでも、六十年前にはまだはっきりとした階級差別や性差別が存在したのだ。

そんな子ども時代を過ごした作者は、ストックホルム大学に進学した。

> ストックホルム大学に学び、一九八〇年に博士論文を提出、二年後には同大学の講師に、一九九一年に国家警察委員会（二〇一五年に現・警察庁に改組）から「警察の手法と諸問題に関する犯罪学」の教授に任命された。その間ずっと学究の徒として専念していたわけではなく、一九六〇年代後半からスウェーデン統計局のコンサルタント、社会省の科学アドバイザーなどの職に就いている。

『許されざる者』文庫版の「解説」（杉江松恋）からの引用だ。

こうした経歴の後、ペーションはミステリー作家となっていく。邦訳されている創元推理文庫の「訳者あとがき」には、出版されたミステリー作品のリストが付されている。『平凡すぎる犠牲者』（久山葉子訳）に付されているリストを参考にすると、次のようになる。

１９７８～８２年　ヨハンソンを主人公にした初期の三部作
２００２年　ヨハンソン〈福祉国家の失墜〉三部作一作目（夏の憧れと冬の凍えの間で）
２００３年　ヨハンソン〈福祉国家の失墜〉三部作二作目（別の時代、別の人生）
２００５年　ベックストレーム『見習い警官殺し』
２００７年　ヨハンソン〈福祉国家の失墜〉三部作三作目（夢の中のように落下する）
２００８年　ベックストレーム『平凡すぎる犠牲者』
２０１０年　ヨハンソン『許されざる者』
２０１３年　ベックストレーム『悪い弁護士は死んだ』
２０１５年　リサ・マッテイ（爆弾職人とその女）
２０１６年　ベックストレーム『二度死んだ女』

この中で、邦訳されていて現在入手可能な作品は『』で記されている五作品。いずれも久山葉子訳で、創元推理文庫で読むことができる。() は未訳の作品だ。出版年の後に書かれている人名はそれぞれの主人公の名であり、リサ・マッテイを含めて、お互いが主人公の作品に登場しているので、すべて同時代が舞台の作品だといっていい。『許されざる』は章のタイトルのように日付が記されている。一章目は「二〇一〇年七月五日（月曜日）の夜」となっている。このことから、すべての作品がおよそ十数年程度前のスウェーデン社会を背景にしていると考えてよいだろう。

見ての通りレイフ・GW・ペーションのミステリー小説はリサ・マッテイを主人公とした一作を除けば、ヨハンソン物とベックストレーム物とに分けられる。前者については邦訳が『許されざる者』のみなので、それだけの印象なのだが、私にはヨハンソンは正義の具現者のように感じられた。国家犯罪捜査局の元長官、ラーシュ・マッティン・ヨハンソン。彼は脳梗塞で倒れて麻痺が残る体でありながら、未解決事件の解決に乗り出していく。

一方エーヴェルト・ベックストレーム警部はというと、悪徳警官を地で行くような男で、警官としてはあるまじき行為を行ないながら事件を解決していく。ネタバレになるのでその詳細は書かないが、免職になってもおかしくないレベルだ。ヨハンソンとベックストレームは真逆のキャラクターといっていいだろう。私には先に引用したペーションの経歴の大学生以降から生まれたのがヨハンソンであり、子ども時代の暮らしから誕生したのがベックストレームであるように思える。ベックストレームは「はっきりとした階級差別や性差別が存在した」時代のスウェーデンを持った人間のようだ。

ベックストレームが担当する事件では、容疑者、関係者に移民など、多くの外国人や障害者、生活困窮者等が登場し、差別の対象として描かれている。ベックストレームの仲間の警官達も、外国出身者や同性愛者など多彩であり、ベックストレームは心の中で差別意識を爆発させている。『平凡すぎる犠牲者』からいくつか拾ってみよう。

「いいぞ」ベックストレームが言った。「続けてくれ」このラップ人野郎め、北の果てハパランダからやってきた長距離バスから転げ落ちたばかりのような訛りだが、さっさと話を聞いてしまったほうがいいだろう。

いかにも今どきのパトロール警官。スキンヘッドのボディビルダーで、どうせＩＱはゴルフのハンデと同じくらいなのだろう。理由は不明ながら、この殺人捜査のために機動捜査隊から貸し出されてきた。低能なフィンランド野郎のトイヴォネン以外にそんなことを思いつくやつはいない。おまけにダーラナ地方出身ときた。ダーラナの赤い馬のロゴのついたクネッケブレッドが口に入っているような話しかただ。膝にポンポンのついた民族衣装で踊っているようなやつが、突然おれの殺人捜査に転がりこんでくるなんて。こんなことで、スウェーデンの警察はどうなってしまうんだ－。

ベックストレームはうなずくだけにしておいた。いったいおれたちはどうなってしまうんだ－。ハッセル小路一番の正面玄関をくぐりながら、そう考えた。スウェーデンの警察で何が起きている？　女々しい男にレズにガイジンに、普通のおめでたいバカども。まともなお巡りさんは、目の届くかぎり一人もいないときた。

とても口には出せない差別意識だ。日本では、たとえ登場人物の心の声だとことわったとしても書くことは憚られるに違いない。ところがこの悪徳警官ベックストレームを主人公にしたミステリーは、スウェーデンでは許容され、多くの読者を獲得しているのだ。福祉先進国というと差別の少ない国という印象を持ってしまうが、必ずしもそうではないのだろう。ベックストレームのような差別主義者ともいえる人間が、スウェーデンでは普通に暮らしているのかもしれない。

そのことを裏付けるようなニュースが今年になって聞こえてきた。スウェーデンで起きたコーランに対する冒涜の事件だ。２０２３年８月２２日付けのＮＨＫニュースのネット配信は、次のように伝えている。

> 北欧でコーランに火をつけるなどの行為が相次ぎ、イスラム諸国が反発を強める中、スウェーデン政府は２１日、こうした行為の規制に向けた検討を始めることを明らかにしました。治安上の懸念も高まるなか政府としての対応を迫られた形です。
>
> 北欧のスウェーデンとデンマークではことし６月以降、イスラム教の聖典コーランに火がつけられるなどの行為が相次いでいて、スウェーデンの首都ストックホルムでは今月１４日にも、イスラム教に批判的な思想を持つ男性がイスラム教の聖典コーランを踏みつけたり、蹴ったりしたあとライターで火をつけました。
>
> スウェーデン政府はこれまで表現の自由を重視してこうした行為の規制に慎重な姿勢でしたが、２１日「治安状況が深刻に悪化している」などとして規制に向けた検討を始めることを明らかにしました。

日本ではスウェーデンのＮＡＴＯ加盟申請にトルコが反対していた理由として、クルド人活動家問題ばかりに焦点が当てられてきた。しかしそれだけではなく、こうしたイスラムを冒涜するような行為に対しての反発も、トルコにはあったのではないかと推測される。そしてこのヘイトとも言える行為の背景には、スウェーデンの「表現の自由」に対する強い思いがあるようだ。ベックストレームは当事者に対して直接差別的な言動をとることを控えようとしているが、容疑者などの中には面と向かって差別的言動をとる者もいる。それがまるで躊躇なく描かれ読者に認められているのは何故なのだろう。私はスウェーデン特有の「表現の自由」への強い意志が関係しているように思えてならない。

高福祉と表現の自由。それは経済状態がよい時には共存する概念だ。しかし経済状況が悪化すると、表現の自由は高福祉を攻撃する武器となる。このことは、日本の社会福祉の現在においては顕著ではないが、未来において警戒するべき課題といえるのではないか。

さらに掘り下げるなら、スウェーデンには過去の移民政策によってもたらされている、スウェーデンにルーツを持つ国民と外国にルーツを持つ国民との間の問題もある。２０２１年１１月２４日ネット配信のニューズウィーク日本版を引用しよう。ジェームズ・トラウブというジャーナリストが書いた『多数の難民を受け入れたスウェーデンが思い知った「寛容さの限界」』という記事だ。

> その後スウェーデン人は学んだ。最も慈悲深い国でさえ、人助けには限度があることを。ここ数年、この国は犯罪の急増に頭を抱えている。スウェーデン国家犯罪防止評議会の報告

書によれば、この国では過去 20 年で銃による殺傷事件の発生率がヨーロッパ最低レベルから最高レベルに増え、今ではイタリアや東ヨーロッパ諸国より高くなっている。

北アフリカからの移民 2 世が中心メンバーのギャング団が密輸などで手広く稼ぐようにもなった。

今や犯罪対策がスウェーデン政府の最重要課題だ。アンデションは演説で移民政策に触れる前に、ロベーン政権の成果として警察官の増員や刑務所の増設、刑法改正の草案作りなど治安強化を挙げた。

教育レベルや所得などあらゆる指標で、新参者が一般の国民に後れを取っているのは無理からぬことだが、驚くのは両者の差の大きさだ。

クルド系経済学者のティノ・サナンダジは著書で、「長期服役者の５３％、失業者の５８％が外国生まれで、国家の福祉予算の６５％を受給しているのも外国生まれの人々」だと指摘している。さらに「スウェーデンの子供の貧困の７７％は外国にルーツを持つ世帯に起因し、公共の場での銃撃事件の容疑者の９０％は移民系」だという。

もはや難民を歓迎する国ではない。

現在スウェーデンの移民の数は５人に１人とも言われている。このこともまた、スウェーデンの福祉を難しくしている要因の一つなのではないだろうか。レイフ・GW・ペーションが『悪い弁護士は死んだ』の中で指摘していた「一日一日を生き延びるために福祉に頼るか、物乞いあるいは犯罪を犯すことを余儀なくされている」者達の中には、子どもの貧困の７７パーセントにのぼるという「外国にルーツを持つ世帯」が多く含まれているのではないだろうか。

ベックストレーム警部の差別主義者ぶりは、表現の自由を盾にとってのヘイトなどではなく、あえてスウェーデン人の中に存在する差別意識を纏わせることで、移民や障害者、高齢者などの生活の向上を願っているように私は読み取った。その証拠に、事件はベックストレーム曰く「女々しい男にレズにガイジンに、普通のおめでたいバカども」の活躍で解決していくのだ。

福祉先進国といわれながら、一面で日本と変わらない実情を見せるスウェーデン。その背景にある経済格差、移民問題。私たちはスウェーデンからノーマライゼーションを学びながら、同時にスウェーデン社会が苦しみ、喘いでいる諸問題からも目を逸らさずにいるべきだろう。いずれ日本も直面するかもしれない今まで以上の経済格差、貧困、移民問題。そんな未来においても、一定水準以上の社会福祉を保っていられるように。

それにしても『ミステリー小説で見るスウェーデンの福祉』というタイトルで書いている私としては、『〈福祉国家の失墜〉三部作』が邦訳されていないことが残念でならない。

（次回に続く）

※現在日本語訳で読むことができるレイフ・GW・ペーションのミステリー小説については、本文内にまとめてあるので今回は省略させていただく。